

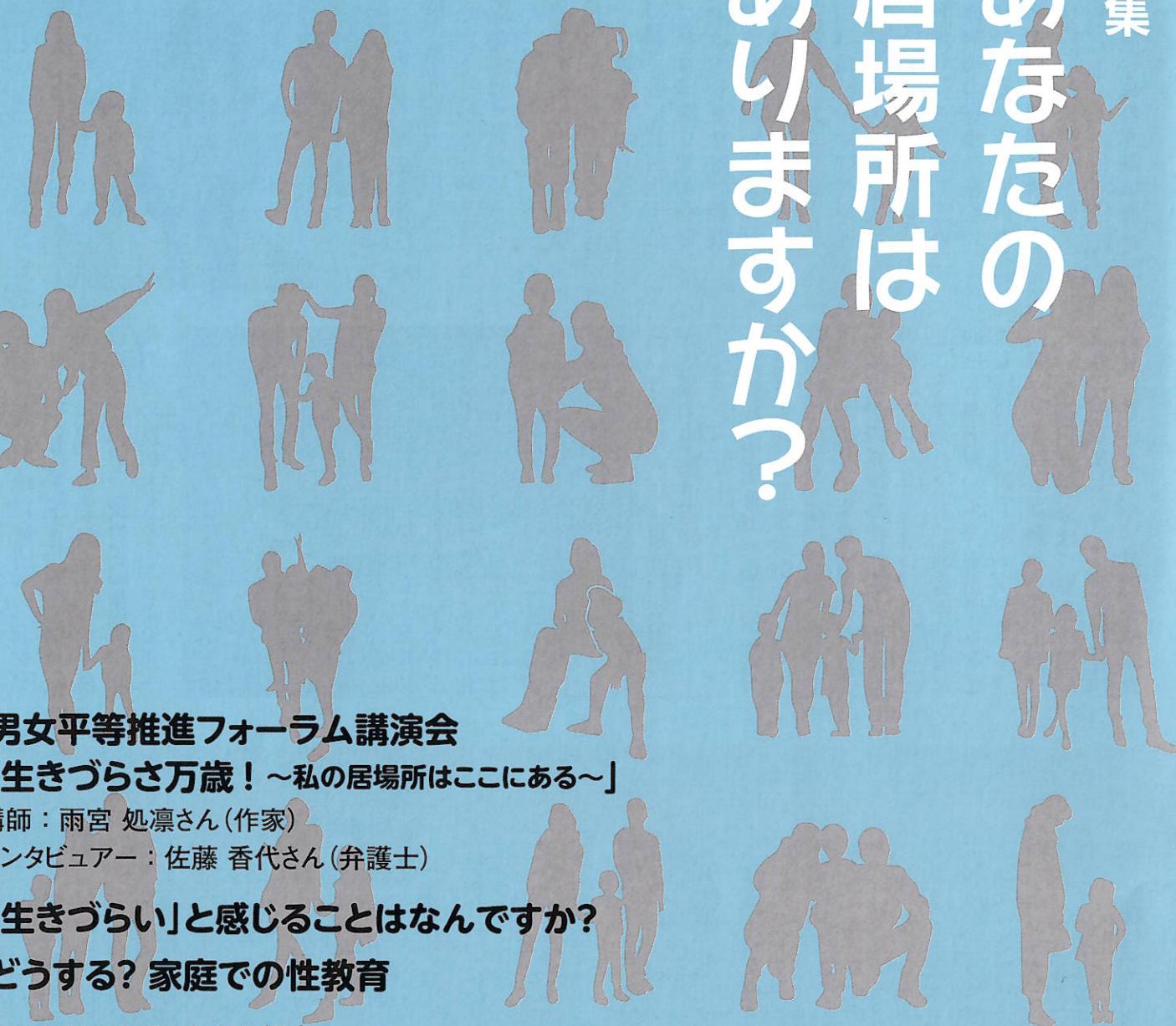
区民と創る台東区の男女平等参画のための情報誌

はばたき21 通信

2018・3
No.35

特集

あなたの
居場所は
ありますか？



• 男女平等推進フォーラム講演会
「生きづらさ万歳！～私の居場所はここにある～」

講師：雨宮 処凜さん（作家）

インタビュー：佐藤 香代さん（弁護士）

• 「生きづらい」と感じることはなんですか？

• どうする？ 家庭での性教育

• たいとうのキラッさん紹介

• はばたき21情報コーナーおすすめ図書案内

• はばたき21公募区民との協働事業の紹介

生きづらさ万歳！

「私の居場所はここにある」

講師 雨宮処凜さん（作家）
インタビュアー 佐藤香代さん（弁護士）



さまざまな生きづらさを抱えていた人たちに寄り添い、発信を続けてきた雨宮処凜さんにお話をうかがいました。

聞き手は、弁護士として、困難な状態にある人たちに関わり続けている佐藤香代さんです。

生きづらさとは、自己肯定感が持てないこと

生きているのが大変

この11年間、主に貧困や格差、生きづらさという問題について書ききました。就職氷河期に社会に出た私自身のフリーター経験が大きいです。「なんで私たちはこんなにも生きることが大変で、こんなにも自分が生きていることが申し訳なくて、迷惑をかけてすみません」と言いつら死んでいかなくちゃいけないんだろう」と思つた

のが問題意識の原点です。

若者が自ら命を絶つこと

労働法制の規制緩和が進み、雇用が不安定化しました。その上に長時間労働、低賃金です。どこの国でも、特に若年層に貧困化が及んでいます。若者に働く気がないという問題ではありません。それを自己責任とされ、追い込まれた20代、30代の死因の第一位は自殺という状態が続いている。

不幸比べも我慢大会もやめよう

ただいま動画で、エキタスというグループのデモの様子を見ていましたが、そのスピーチの言葉が「不幸比べも我慢大会もういい加減に終わりにしませんか」とありました。

貧困について社会の認識は進み

弱い立場の人へ暴力を向ける傾向

相模原の事件（＊注）の被告、彼自身も弱者の要素があります。殺人によって「役に立つ」自分をアピールする、生産性・利益至上主義思想の究極に行き着いた最悪の事件でした。

こうしたねじれ、弱者が弱者に向ける暴力は、ネット上でもどこでも溢れています。

フェミニズム運動が盛り上がり始めた韓国の場合は、怒りが国の方に向きました。日本の場合は、運動している人や、貧困や困難な

状況の当事者に向けられています。この構図も、日本で有権者教育がなくて消費者教育しかないことが関わっています。いかに消費者マインドから脱却するかを意図的にやつていかないと、この暴力は終わりません。私たち日本人も時には国に怒つていいんです。

怒りと自己肯定

怒りにも自己肯定感が必要で、価値があるはずの自分が、なぜ不当な扱いを受けなければならぬのか」と思えないと怒れません。若い世代は「社会のせいにするな。卑怯者」と言われ続け、困難な状況を社会問題ではなく100%自分の責任と思い込んでいます。そういう人に「怒れ」と言うと、怒りすべてが自分に向かい、自傷行為やリストカット、自殺にまで追いつめられてしまします。

まず初めに「あなたには価値がある」「あなたを大切にしてくれないような場所にいなくていい」とか「だめなやつ」とは誰も言いません。「無条件の生存の肯定」それが運動のスローガンです。「無条件で、無理矢理でも肯定してい

迷惑をかけあえる関係づくり

無職の人も多いフリーター労組に入っていますが、そこでは「働け」とか「だめなやつ」とは誰も言いません。「無条件の生存の肯定」それが運動のスローガンです。「無

「助けて」と言う

「助けて」と言われる

ところが「助けて」というためには、二つのハードルがあつて、一つは自己肯定感の欠如です。自分が価値がない存在だと思つたら、言えません。さらに二つ目は「この世の中はそんなに捨てものじゃないかもしない」ということを知られたら、もつとひどい言つてもらえるかと考えたら、振る舞いが変わります。日頃のすべての言動が問われているので、誰にも「助けて」と言われていない人は、自分を振り返つてみてほしいと思います。

言つてもらえるかと考へたら、振る舞いが変わります。日頃のすべての言動が問われているので、誰にも「助けて」と言われていない人は、自分を振り返つてみてほしいというメッセージを送りたいと思います。

（注）相模原事件
2016年7月26日未明、神奈川県相模原市にある知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件。



☆もつと詳しく知りたい方は、はばたき21情報コーナーにある「フォーラム記録集」をご覧ください。

ましたが、同時に貧困バッシングも起きています。すべてのことを、問題を抱えている個人の甘え・自己責任にして、政府も世間も、解決のために何もしないことを正当化しています。

エキタスは、最低賃金1500円を掲げて2015年から活動し、1500円になつたらどうしたいか？」と問い合わせた時、「一番多かった回答が「病院に行きたい」でした。他には「もやしと鶏肉以外のおかずが食べられる」などがありました。貧困はグローバル化と関連しています。対抗するには世界と連携しなければという意識で、エキタスはアメリカの運動に呼応して活動しています。

回答者の年代
・20代 4名
・30代 3名
・40代 10名
・50代 16名
・60代 13名
・70代 6名
・80代 6名
・無記入 5名
計63名

来場者の感想

来場者のうち、63名の方にアンケートの回答をいただきました。

- この講演で、想像以上に厳しい現実を知ることになりました。
- 自己肯定感を持ち、それでも生きづらいと感じた時には声を上げ、その一方で、その声をキャッチできる人が増えていくと、皆が生きやすい社会に近づけるのではないかと思いました。
- この講演で、想像以上に厳しく現実を知ることになりました。
- 生きやすい世の中になつて欲しい。そういう話はもつと多くの人に知つてもらいたい。貧困は他人ごとではない。
- 皆が生きやすい世の中になつて欲しい。
- 勝つことや付加価値を持つことにとらわれず、強く柔軟に生きて幸せになることを目指したい。
- 公的な支援が厚くなるべき。国や政治、社会が変わらないといけない。
- 現実に目を向ける大切な時間になつた。
- 地域で虐待を減少させたい。
- 様々な課題があり、相互に影響していると感じた。
- SOSをキャッチできる人であります」と感じた。
- 居場所を見つけることが大切。
- 男女平等は必要。結婚にも同様。

「生きづらい」と
感じることはなんですか？

台東区在住の3名の方に
フォーラム講演会と同じ
テーマで、編集委員が
お話を聞いてきました。



つらい時はつらいって素直に
言える場が必要だと思います。

谷

谷 中に住む乳幼児をもつ家庭に向けて地域の情報発信する「谷中ベビーマム安心ネット」（以下略・ベビーマム）。主宰の石田桃子さんがベビーマムを立ち上げたのは2011年4月のこと。きっかけは3月に起きた東日本大震災でした。

「乳幼児をもつ家庭って、保育園でもなく、幼稚園でもなく、どこにも所属していない感じがあるんですね。そんな『どこにも所属していない感』の中で、お母さんたちは初めての育児でヘトヘトになつていて。そこに大地震が起きて、周りのお母さんたちを見ていても、とても強いストレスがかかっているなど感じていました」

被災地へ思いを馳せながら、東京では、余震への恐怖や原

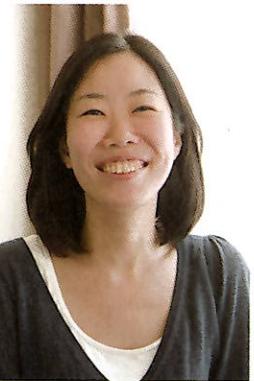
ママ安心ネット。谷中エリアの保健、防災、医療、育児、お祭りなどの生活情報を発信するほか、生活必需品や育児用品などを譲り合う輪を広げたり、皆で顔をあわせて集まるようないベントを開催しています。

ベビマムの活動を続けて7年目。石田さんのもとにいろいろな人が集まつてくるようになりました。

「町のことや家族のこと、心配な子のことやパートナーのことなど、個人的に相談を受けることがあります。地域の方から『あの人とのところに

の話を聞き、時に公的機関へ
つないだり、石田さんの知り
合いの専門家に相談するな
ど、問題解決への”入口“の
ような存在になっています。
「いろいろな方とお話をす
る中で、自分のつらさを素直
に言える場がないと、今の世
の中、生きていくのは難しい
んだな、生きづらいんだなあ
と感じています。つらい人は、
つらいって、素直に□にだし
て言つてもいいと思うんで
す。ただ、それを言える人だつ
たり、言える場が必要なんで
すよね」
その”言える場“になれた
らと、石田さんは自宅を開放

行けば何か知っているかもしない』と、生活の中での困りごとや課題を抱えている人を紹介されることもあります。シングルマザーや発達障害の子をもつ方、精神疾患のある方や思春期の子などさまざまです」



「生きづらいと感じることはなんですか？」

- 仕事
 - 家族の病気
 - 終活
 - いじめ
 - ジェンダー問題
 - 夫婦別姓で結婚できない
 - 男性中心社会
 - 在日外国人への差別
 - 迷惑行為
 - マナーの欠如
 - 社会格差
 - 歪んだ利己主義
 - 家庭内の男女不平等
 - 貧困
 - 障がい者であること

フォーラム講演会会場アンケートより

勤で中国の上海から東区に暮らし始め4年になるコウさん(34歳)は二人の子供の育児で、日々さまざまな壁に直面しています。

「最初の頃は、学校で使うノートや鉛筆など、どこで買えるのか、どんなものが必要なのか、まったくわかりませんでした。体育着や水着なども、手紙でお知らせがくるけれど、何をどうしたらいいのかわからなかつたです」

学校の先生がフォローしてくれるそうですが、コウさんは日中は仕事をしているため、先生に相談することはなかなか難しいと言います。

「日本人のお母さんたちと仲良くなれるのかというのもすごく不安でした。なるべく仕事を休んで、保護者会やPTAの会にも出るようにしましたが、輸に入ることができませんでした」

1年ほどそのような状態が続き、慣れない地での生活に、仕事と育児も重なり、コウさんは体調を崩してしまいました。そんなある日、学校の保護者会後に一人のお母さんが話しかけてくれたのだそう。

「中国のどこ出身なんですか? わからないことがあったらいつでも連絡ちょうどいいと連絡先を交換してくれました」

その方は、台東区で生まれ育ち、結婚してからも同じ町に住んでいることもあります。近所のことにも詳しく、学校のことや生活にまつわることなどを教えてくれます。

「運動会での場所取りのコツとか、制服が安いお店、習い事のことなどいろいろ教えてくれます。一時は、話せる人もいなくて、中国に帰りたいとずつと思つていました。でも、その人が『困ったときはお互い様って言葉が日本に

「あるんだよ」と言つてくれ、私のことを助けてくれます。毎日、いろいろ大変ですが、この町での生活を楽しんでいきたいと思つています」

『い』と言われます。親に彼女のこと話をして『私は大丈夫だよ、幸せだよ』って伝え安心させてあげられたらいいなあと思うけれど、親は『同性愛』なんて受け止められないから」とサチエさん。

一方、力ナさんは友達や家族、同僚や上司にもサチエさんの存在を話していく、週末にはサチエさんと両親と食事をすることもあるのだそう。

「これからも一人で支え合つて暮らしていきたい」と話す力ナさんとサチエさん。二人が生きづらいと感じるのはどのようなことでしょう。

「同性カップルだと、賃貸住宅が借りにくいです。ゆくゆくは一人で家を買いたいと思つても、婚姻関係にないのでは当然、一人でローンは組めません」と力ナさん。

そしてサチエさんも続けて「病院の問題もあります。



しています。近所の人が「家にいるのがしんどい」と石田さんの家に来て、気持ちが落ち着くまでリビングで時間を過ごしたり、近所の子供たちが遊びに来て、子供を迎えてきたお母さんも一緒に晩ごはんを食べて帰るなんてことが日常的にあるのだそうです。

昨年の9月からは、月に一度、石田さんの家で「みんなでごはんを食べる会」を始めました。

「自分の居場所や、自分を受け入れてくれる場所って、あちこちにあっていいと思うんです。『ここなら自分は大丈夫』という場所が選べるといいな

と。ちょっとした悩みだつたり、ちよつとした相談事を話せる場がなかつたために、大事になつてしまつことつてあるんですね。それ、誰かに話せていたらよかつたのに…って。だから、そんな”場“を設けてもいいのかなと思つて、月に一度、この家でみんなでごはんを食べることにしました」

石田さんは自分自身も、人に、そして町に、助けられてきたと言います。「せつかく同じ町に住んでいるのでだから、困つたときはお互ひ様。頼り合いながら暮らしていけたらいいですよね」と、やさしい

町の雰囲気が好きで、この町に引越してきました

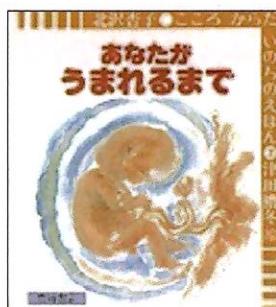
もし彼女が急病で入院するようなことがあっても、家族がないと面会謝絶ということも起ります。最近では生命保険の受取人を同性パートナーにすることもできるようになつてきましたが、男女であれば結婚によつて受けられるサポートが、同性カップルには何もないというのが現状です。私たちは生計を一にして生活を共にしているけれど、法律の下では赤の他人です。生きづらさがなくなるように公的な制度が整っていくことを願っています」

赤ちゃんはどこから来るの？

Books

情報誌編集委員が選んだ

おすすめの図書～台東区立図書館より～



『あなたがうまれるまで』
北沢杏子 作
津田櫻冬 絵
岩崎書店



『ふたりのはなし』
山本直英 さく
和歌山静子 え
童心社



『親と子で語る性のはなし』
R. H. ハリス 文
おきたげん 訳
M. エムバリー 絵
ほるぷ出版

- ・『正しい保健体育』みうらじゅん 著 イーストプレス
- ・『わたしのはなし』山本直英／和歌山静子 さく 童心社
- ・『おちんちんのえほん』
やまもとなおひで・ぶん さとうまきこ・え ポプラ社
- ・『メグさんの男の子のからだとこころQ&A』
メグ・ヒックリング 著 三輪妙子 訳 築地書館
- ・『男の子が大人になるとき』
岩室紳也 監修 中村光宏 絵 少年写真新聞社

からの方が、より詳しく理解をすることができると思います。お子さんが産まれた時、みんなが誕生を喜んだことや、小さくてとても愛おしかった、などということを教えてあげると、子供は『自分は大事にされているんだ』と感じる事ができます。すると、自分や周りの人や友達を思いやり、大事にできる心が育まれていきます

幼い頃からの積み重ねと
子供との関わりが大切

なんでもオープンに話をする必要はありませんが、入浴を一緒にする、新聞やテレビの話題から話をしてみると、赤ちゃんはどこから来るのか、より詳しく理解することができます。

「幼い頃からの積み重ねが大切で、その後、子供の『なぜ』に向き合い、子供が理解できる範囲で話をしてあげれば、子供はきちんと受け止めることができます。逆に閉鎖的になつて、子供の興味の芽を、『まだ早いから』といつて摘みとつてしまふと、子供の中で、性的なことは、『聞いてはいけない』と『けがらわしいこと』などの負のイメージがついてしまい、間違った生理観である月経不淨視や自己卑下の気持ちにつながることもあります。また、人を好きになつたりする」とも、家では話してはいけないと理解し

てしまう可能性があります。性的な知識はその子供の疑問に合わせて話してあげて、むしろ、人を愛することは素晴らしいこと、人を愛することとはどういうことかを感じ、学んでいく」とができます。

『受精』については、小学校の授業の中でも学習しますし、それは成長してしまった。

どうする? 家庭での性教育

子供からの突然の質問に思わず考え込んでしまったり、説明に困ってしまうということがありますか？ そんな時はどうすればいいのでしょうか。家庭での性教育について、助産師の嶋村さんにお話をうかがってきました。

「子供は、日々たくさんの刺激の中でいろいろな『なぜ』と共に存しています。そしてなんとなく知りたくて『どうして？』と、無邪気に聞いてくるものですが、『性教育をしなきや！』と身構えず、肩の力を抜いて、お子さんがわかる言葉で、その子が今、理解できる範囲で、『なぜ』に向き合つてあげることがとても大切です」と嶋村さん。子供と話をするにあたっては、「どうしてそのことを知りたくなつたのか、その『きっかけ』を子供から聞いてみるとよいのだそうです。幼稚園で友達から何かを聞いたとか、友達の家に赤ちゃんが産まれたのを知ったとか、うきつと何かしらきっかけがあるはずです。子供が興味を持った背景を知ることで、子供にどのように話をすればいいのかヒントになるのだそうです。

オリジナルのストーリーで
伝えると理解が深まる

では、どのように話をすればいいのでしょうか。ゆくゆくは学校で教えてくれ

るから、家庭内でわざわざ話をする必要はないと思うかもしれません、学校には学校の教え方があります。家庭では、学校とは違い、その子に合った話ができるので、それぞれの家庭の教え方で、お子さんと話をしてみてください。自分自身のことを話してみてくださいと嶋村さんは言います。「お子さんが、どうしてそのことを疑問に思ったのか、その『きっかけ』を疑ってみてください。もし友達の家に赤ちゃんが産まれたことがきっかけになつた時ね」と、お子さんが産まれた時に置き換えて話をしてあげてみてください。自分自身のことを話してみてください」と、より理解が深まると思

たとえば、子供が生まれた時の写真と一緒に見ながら、「初めてあなたを見た時、とてもかわいいと思った」というお母さんの気持ちや、「お父さんは、あなたを見て、うれしきれて泣いていたんだよ」など、お父さんのその時の様子や周りの方々の反応などを話してみるのもよいのだそうです。

「せひにさかのぼって、お父さんとお母さんはどのようにして出会つたのか、そして『お父さんとお母さんが愛し合つてあなたが産まれてきたんだよ』と話してあげてください。『大好き』や『愛し合つて』などの言葉は、子供が理解できるわかりやすい言葉を

見つけ、今の『あなた』が生まれたオジジのストーリーを話してあげるのです」

小さいちは、お父さんとお母さん、おじいちゃんとおばあちゃんなどといった家族のつながりや、命のつながりを中心に話をしてあげる方が理解がしやすいと嶋村さんは言います。



嶋村克子さん

公益社団法人日本助産師会 地域貢献室 助産師。大学病院等で助産師として約4年勤務し、第一子出産後退職し専業主婦となる。平成3年第二子が小学校へ上がるとき、母子訪問指導員となり地域の助産師活動を始める。



嶋村さんは「いつから子供に教えたらいいのか？」「具体的にどのように子供の疑問に答えればいいのか？」をお聞きしようと教えていました。

しかし、嶋村さんのお話を聞いていううちに、その答えは「子供のタイミング」や「家庭の中」にあることがわかりました。

●INFORMATION●

たいとうのキラッとさん紹介

いづみさわ とも子さん NPO法人 ガイドヘルプあいサポート理事長

和泉澤さんは視覚障がいを持つ知人と外出する機会を作るため、「社会の役に立つことをしたら」という娘さんの一言をきっかけに視覚障がい者の移動支援事業に関わりはじめました。移動支援から同行援護への制度変更に伴い、有志のヘルパーと平成24年にNPO法人を設立して、視覚障がいをもつ人の外出をサポートしています。そのほか、企業や学校でアイマスク体験会やガイドヘルプ研修を開いて、視覚障がいへの理解促進にも努められています。

利用者の中には、スキューバダイビングや山岳マラソン、写真撮影などを趣味にする方もいて、以前より外出する機会が増えたと利用者から喜びの声が届けられており、「末長くこの活動を続けていきたい」と抱負を語ってくれました。



はばたき21情報コーナーおすすめ図書案内

『不自由な男たち

—その生きづらさは、どこから来るのか

小島慶子・田中俊之著 祥伝社



「俺って何?」
男だって、弱音を吐きたい!

「働いて家族と生きる」というごく当たり前の事が、しんどい世の中は間違っている。男と女で責任をなすり合うのではなく、一緒に声を上げて言うべきときというのが著者ふたりの結論。

『ルポ 希望の人びと

—ここまできた認知症の当事者発信

生井久美子著 朝日新聞出版



これまで認知症は主に家族や医療・介護する側の視点で捉えられてきた。しかしいま、当事者の発信が社会を変えようとしている。認知症をめぐる問題のほとんどは「人災」であることもわかつてきた。いのちの現場からの渾身の報告。

『ハイスペック女子の憂鬱』

矢島新子著 洋泉社



高学歴、高収入、高ルックス…、彼女たちはなぜストレスでツブれるのか!? 女性産業医が見た一億総活躍社会の現実と、仕事のできる素敵な女性が生活と仕事の両立を楽しめる時代がくることを願って書かれた一冊。

はばたき21公募区民との協働事業の紹介

男女平等推進フォーラム

ひとりひとりが個性と能力を十分に發揮できる男女共同参画社会の実現に向けて、年に1回実施している区民参加のイベントです。

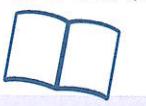
講演会や男女平等推進登録団体によるワークショップ・作品展示などを実施しており、どなたでも参加できます。



はばたき21通信

男女平等を推進するための情報誌です。8月と3月の年2回発行しています。2002年7月に創刊号を発行し、本誌で35号目となります。

区役所や区民事務所、生涯学習センターなどの区内施設、都内女性センターなどで配布しています。



コミュニティ・カフェ

毎月第3土曜日の14時~16時に、プラザの調理コーナーで開催しています。参加費無料、予約不要、どなたでも参加できます。

カフェ運営委員による温かいもてなしと楽しい小物作りで、誰もがほっとできる場を提供します。



編集・発行：台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」

台東区西浅草3-25-16（台東区生涯学習センター4階）

電話 03-5246-5816 ※日曜・休館日以外の9時~17時

開館時間 9時~22時

休館日 第1・第3・第5月曜日（祝日にあたる場合はその翌平日）

年末年始(12月29日~1月3日)

情報誌編集委員（五十音順）

市村 有花里・漆原 美智子・河村 直希

近藤 章子・佐藤 陽子・鈴木 渚・富樫 聖子

ホームページ [はばたき21](#) 検索

